

to be シリーズ *to be*

がん哲学

樋野 興夫

順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授

本書を、両親と妻、

さらに恩師クヌドソン (Knudson) 博士にささげらる

第一章 がん細胞の世界から人間社会を語る

- 「がん哲学」の気概——ミクロの世界でマクロの世界を思う 12
- 「天寿がん」の時代に向けて——名詞の世界から形容詞の世界へ 14
- ミクロの世界の知恵——「がん哲学」の提唱 16
- ゲノム時代の到来——人は宇宙を内包する 18
- クローン時代を迎えて——遺伝子ですべては決定されない 20
- 倫理とは慣れ？——事例先行 22
- がん化を左右する境遇——環境が大きく作用 24
- 大成するがんの芽は千分の一——がん性化境遇 26
- がんの発症部位と生活スタイル——食生活の変化で違い 28
- 睡眠中の遺伝子、活動中の遺伝子——違いに意義あり 30
- がんの告知——問われる医師の人格 32

第二章　がん細胞の知恵に学ぶ

- がんの成長は階段を上のごとし——発がんの三カ条 36
- 犠牲を伴う真の貢献——献身 38
- がん細胞は自分を変えて転移する——痛みを伴う変革 40
- 人間社会のがん化——がん細胞のリハビリ 42
- がん化は一つの遺伝子との「出会い」——起始遺伝子は扇の要 44
- 「ニバン」と「ニホン」——日本語で世界に定着 46
- ゲノム時代と発がん研究——病気のドラマタイプ 48
- 尺取虫運動で歩むがん細胞——方向（生き方）を決めよう 50
- オーダーメイド治療の時代に——がん細胞のねらい撃ち 52
- がんは質的変化で成長——連続における不連続性 54
- がん細胞の二つのタイプ——内発的がん、外発的がん 56
- 再生医療と寿命——寿命の壁は百二十歳？ 58
- 適時診断と的確治療——すべてのことには「時」がある 60
- 相反するものの同居——楕円形の真理 62

第三章 先人の志を継承しつつ

日本は化学発がんの創始国——日本病理学の父、山極勝三郎 66

がん哲学者の風貌——静思から得られた結論を語る人たち 68

吉田富三の「志」を継ぐ——「温故創新」の責務 70

人物を通して流れる歴史の動脈——真の改革とは 72

ビジョンは世代を超えて——百年の計の根拠 74

先人の会話の立ち聞き——真の人間の功績とは 76

若き日に人格的出会いを——教育の本質 78

「急ぐべからず」——誠実本位 80

心的不消化からの脱出——目下の急務は 82

お茶の水メデイカル・アカデミア構想——吉田富三の命題の実現 84

第四章 病理学の復権を

本当のプロとは——真の独創性に立って 88

病理学の復権を夢見て——広々とした病理学 90

専門分野からの哲学者の誕生を——「具眼の士」出よ 92

第八章 がん哲学との出会い 患者・家族の立場から

187

がん哲学外来の紹介 202

おわりに 204

コラム

吉田富三の言葉 ① 34

吉田富三の言葉 ② 64

吉田富三の言葉 ③ 86

吉田富三の言葉 ④ 110



樋野 興夫 (ひの・おきお)

1954年島根県生まれ。順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授、順天堂大学大学院医学研究科環境と人間専攻分子病理病態学教授、医学博士。癌研病理部、米国アインシュタイン医科大学肝臓研究センター、米国フォクスチューズがんセンター、癌研実験病理部長を経て現職。日本家族性腫瘍学会理事長、日本癌学会理事、日本病理学会理事、日本肝臓学会の評議員、NPO法人「がん哲学外来」理事長、第99回日本病理学会総会会長ほかを歴任。肝臓および腎臓の研究で、日本癌学会奨励賞、日本実験動物学会賞、癌研究会学術賞、高松宮妃癌研究基金学術賞、「新渡戸・南原基金」第一回「新渡戸・南原賞」などを受賞。